

オペレッタ表現活動における一考察

— 保育者・教員養成校における実践から —

A Study on Operetta Expression Activities

—Based on Expression Activities in Childhood Educators Training Facilities—

山本裕之

要 旨

本研究では、筆者が担当する児童教育学科3年次開講科目「児童教育学専門演習Ⅰ・Ⅱ」における「オペレッタ」（音楽表現活動）について報告するとともに、履修学生が取り組む過程において、どのように豊かな表現力を育てていくのかを考察する。

オペレッタは、音楽（歌唱・合唱・器楽アンサンブル）、演劇、ダンス、舞台装置、大道具、小道具、衣装、照明等を含む総合芸術である。オペレッタを創り上げるには、協働する力や創造力、表現力、コミュニケーション力、課題解決力等が必要である。オペレッタを創作する活動を通して、履修学生には鑑賞者に伝えるための様々な表現の工夫が見られ、学生自身が豊かな表現力を育む活動となっていることが確認できた。さらに、豊かな表現力のみならず、創造力、協働力、想像力、感情移入力、コミュニケーション力、課題解決力も育むことが確認できた。

また、卒業後も在学時に取り組んだオペレッタ音楽表現活動を、保育士や幼稚園・小学校・特別支援学校教諭として、子どもの豊かな心を育てる情操教育に生かしていきたいと考えている履修学生も多い。

履修学生を対象に行なったアンケート結果を基に、学生がオペレッタ表現活動を通してどのようなスキルを身につけ、心豊かな人間として成長していくのかを考察する。

キーワード：オペレッタ 総合芸術 表現力 創造力 想像力 協働力 感情移入力 コミュニケーション力 課題解決力

はじめに

平成29年3月に告示され、令和2年度から全面実施となった改訂小学校学習指導要領第2章第6節音楽では、目標及び各学年の目標において、いずれも(1)「知識・技能」、(2)「思考力・判断力・表現力等」、(3)「学びに向かう力・人間性等」の3つの項目に分けて示された。これは学習指導要領の総則に示されている資質・能力の「三つの柱」と関連付けられている。また、教科の目標においては、育成すべき資質・能力として、「音楽的な見方・考え方を働かせ」、「生活や社会の中

の音や音楽と豊かに関わる」という文言が加えられた。

「音楽的な見方・考え方」については中教審において次のように説明されている。「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること。」すなわち、音楽を形づくっている要素の働きを感性的に捉えて理解すること、それから得られる心の動き、生活や文化などとの関わりについて考えることが重視されている。

また、音楽科の目標には、具体的に以下の3点が示されている。

- (1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。
- (2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。
- (3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。

特に、下線部の児童が表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付け、音楽表現を工夫し、音楽活動の楽しさを体験し、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育み、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培うには、何よりも指導する教師自身が身に付けていなければならない資質・能力でもある。

これらの資質・能力は、正にオペレッタ表現活動によって身に付けられる資質・能力であると考えられる。

筆者が担当する児童教育学専門演習Ⅰ・Ⅱにおいて、1993年から取り組んでいるオペレッタ表現活動の概要について述べるとともに、2017年度、及び2018年度児童教育学専門演習Ⅰ・Ⅱ履修生50名を対象に実施したアンケート調査結果を踏まえ、考察を深めていきたい。

1. オペレッタの定義

音楽と劇とが融合された舞台作品は、以下の4つのカテゴリーに分類できる。

- (1) オペラ (2) オペレッタ (3) ミュージカル (4) 創作オペレッタ (学校園)

それぞれを解説すると、以下の通りである。

(1) オペラ

オペラは16世紀末に古代ギリシアの悲劇の復興をめざした、フィレンツェのカメラータという、詩人や音楽家のグループの創作活動の結果として生まれた。その後、イタリア各地に広まり、多くの作品が生み出されていった。オペラは演劇と音楽が融合されたもので、日本では歌劇と呼ばれている。演劇に登場する役者がオーケストラの伴奏に合わせて、台詞を話したり、台詞に音程を付けて喋るように歌ったり(レチタティーヴォ)、また歌詞に旋律を付けて歌ったり(アリア)と、独唱・重唱・合唱の形態で演奏される。演奏される音楽は、バロック、古典派、ロマン派、近代・現代のクラシック音楽である。ポップスやジャズ、ロック音楽とは異なる音楽である。上演時間は、

1時間から長いもので4日間(約15時間)に及ぶ作品(ワーグナー作曲楽劇「ニュルンベルクの指輪」)もある。

(2) オペレッタ

オペレッタは、直訳すれば小さいオペラとなる。つまり小歌劇である。19世紀後半にウィーンやパリで盛んに演奏された喜劇的な軽い内容の大衆的な作品が多く、オペラより台詞で喋る部分が多い。演奏される音楽はクラシック音楽であるが、独特な3拍子のウィンナー・ワルツで軽快に演奏されるものもある。

(3) ミュージカル

ミュージカルは、19世紀末から20世紀初頭にかけてアメリカで生まれ発展した舞台芸術。演劇、台詞、ダンス、歌唱、音楽(ジャズ・ポップス)が融合した音楽劇である。

現代では、アメリカ・ニューヨークのブロードウェイミュージカルや、日本の劇団四季によるミュージカルが有名である。

(4) 創作オペレッタ(学校園)

日本では、子どもが演じたり、子どもが鑑賞したりする保育園や幼稚園、認定こども園、小学校等で取り上げられる音楽劇のこともオペレッタと呼んでいる。台詞のみで進行する劇あそびではなく、音楽に合わせて身体表現をしたり、歌ったり踊ったりと、子どもが音楽を通して主体的に表現しながら楽しみ、豊かな表現力や感性を培うことにつながっていると考えられる。

本論文において、筆者が履修生と共に取り組むオペレッタ表現活動は、「学生が演じて幼児・児童が鑑賞する音楽劇」と定義している。

2. オペレッタ表現活動(オペレッタ・ボランティア公演)概要

筆者が、3年次ゼミの授業にオペレッタ表現活動を取り入れたのは1992年からである。また、学外の教育・保育現場において、創り上げたオペレッタを子どもたちとの「ふれあいボランティア公演」として発表したのは1993年からである。以後、今日まで、ほぼ毎年オペレッタ公演を行っている。

オペレッタ(小歌劇)は、独唱、重唱、合唱、器楽によるアンサンブル演奏、ダンス、演劇、舞台美術、衣装等のすべてを含む総合芸術である。ゼミ生は、この様々な芸術的要素が含まれているオペレッタ表現活動に取り組むことにより、豊かな表現力や創造力、想像力、コミュニケーション力、仲間とともに協働する力などを身につけている。

オペレッタで使用する台本の脚色や、大道具、小道具、衣装なども、すべて3年次ゼミ生による手作りである。1年間かけて創り上げた作品を、本学児童教育学科定期演奏会で発表し、その後、オペレッタ・ボランティア公演として、兵庫県下を中心に保育園・幼稚園・認定こども園・小学校等で実施している。

オペレッタの台本の脚色は、ゼミ生がディスカッションを重ね、「未来ある子どもたちが夢や希

望を持ち続けることの大切さ」、「友だちや命の大切さ」、「思いやりの気持ちを持ち、仲間と協働することの大切さ」など、子どもたちの健やかな成長を願うメッセージを込めて制作している。

ゼミ生は、子どもたちに生演奏の音楽や演劇の素晴らしさを届けると同時に、子どもたちの健やかな成長を願い、子どもたちの心に響くメッセージも届けている。公演先の園児や児童の反応も良く、将来、幼稚園や小学校教員、保育士を志望する学生にとっては、音楽を通して子どもたちとふれあうことのできる貴重な体験の場ともなっている。

さらに、この出張公演は先生方や保護者の方々からも好評を博しており、ありがたいことに、年々学校園からの公演依頼も増加している。また、このオペレッタ表現活動は青少年に夢と希望を与え、青少年の健全育成に資するものとして認められ、『平成17年度こうべユース賞』（神戸市青少年育成協議会・神戸市）、平成25年度「神戸キワニス社会公益賞」（神戸キワニスクラブ）、平成29年度「青少年を地域で讃える賞」（神戸市北区）の各賞を受賞している。

2019年3月31日現在、公演延べ回数は86回を数えている。

3. オペレッタ・ボランティア公演実績（1993年～2020年）

1993年	1	明石市立錦が丘小学校	2006年	25	神戸市立有馬小学校
1994年	2	神戸市立好徳小学校		26	南あわじ市立沼島小学校
1995年	*阪神・淡路大震災による甚大な被害のため公演中止			27	芦屋市立小槌幼稚園
1996年	3	私立甲陽幼稚園		28	私立親和保育園（神戸市）
1997年	4	神戸市立八多小学校		29	保育園、幼稚園合同公演 【神戸市立鈴蘭台北町保育所、 神戸市立すずかぜ幼稚園、 私立いりえ幼稚園（神戸市）、 私立泉台幼稚園（神戸市）】
1998年	*筆者が在外研修（イタリア：ミラノ・スカラ座歌劇場）のため実施できず				
1999年	6	神戸市立玉津第二幼稚園	2007年	30	神戸市立藤原台小学校
	7	神戸市立淡河小学校		31	芦屋市立精道幼稚園
2000年	8	神戸市立鈴蘭台小学校		32	私立親和保育園（神戸市）
	9	西宮市立上ヶ原幼稚園		33	ピース・キッズ音楽会 （障害児のための音楽会）
2001年	10	神戸市立小部東小学校	2008年	34	神戸市立蓮池小学校
	11	芦屋市立西山小学校		35	芦屋市立西山幼稚園
2002年	12	神戸市立南五葉小学校		36	芦屋市立小槌幼稚園
	13	神戸市立御影幼稚園		37	私立千鳥が丘親和保育園（神戸市）
	14	芦屋市立岩園幼稚園	2009年	38	神戸市立筑紫が丘小学校
2003年	15	神戸市立泉台小学校		39	芦屋市立精道幼稚園
	16	芦屋市立伊勢幼稚園		40	神戸市立御崎保育所
	17	私立すずらん台幼稚園（神戸市）		41	私立ことぶき保育所（神戸市）
2004年	18	神戸市立甲緑小学校	2010年	42	兵庫県立神戸特別支援学校
	19	芦屋市立小槌幼稚園		43	神戸市立明親小学校
	20	私立親和保育園（神戸市）		44	私立親和保育所（神戸市）
	21	私立二宮保育園（津山市）		45	芦屋市立精道幼稚園
2005年	22	神戸市立桜ノ宮小学校	2011年	46	三木市立緑が丘東小学校
	23	芦屋市立朝日が丘幼稚園		47	芦屋市立岩園幼稚園
	24	私立親和保育園（神戸市）			

2011年	48	淡路市立浦小学校	2016年	72	三田慈愛幼稚園
	49	私立千鳥が丘親和保育園（神戸市）		73	すずらんホールファミリーコンサート ※1
2012年	50	淡路市立浦小学校	2017年	74	神戸市立古湊保育所
	51	芦屋市立朝日が丘幼稚園		75	神戸親和女子大学付属親和幼稚園
	52	芦屋市立山手小学校		76	すずらんホールファミリーコンサート ※1
	53	私立霞ヶ丘幼稚園（神戸市）	2018年	77	芦屋市立西山幼稚園
54	塩竈市立新浜町保育所	78		芦屋市立岩園幼稚園	
2013年	55	神戸市立押部谷小学校		79	洲本市立洲本第三小学校
	56	高和小学校		80	神戸親和女子大学付属親和幼稚園
	57	芦屋市立精道小学校	81	すずらんホールファミリーコンサート ※1	
	58	芦屋市立潮見幼稚園	2019年	82	兵庫県神崎郡市川町立川辺小学校
59	私立いりえ幼稚園	83		芦屋市立小槌幼稚園	
60	私立鈴蘭台北町保育所	84		芦屋市立西山幼稚園	
2014年	61	淡路市立尾崎小学校		85	神戸親和女子大学付属親和幼稚園
	62	芦屋市立精道幼稚園	86	すずらんホールファミリーコンサート ※1	
	63	芦屋市立伊勢幼稚園	2020年	*新型コロナウイルス感染症拡大防止のため公演を中止とした。中止とした公演は以下のとおりである。	
	64	私立三田慈愛幼稚園		87	蓮池保育園
	65	私立松風幼稚園		88	芦屋市立潮見幼稚園
2015年	66	神戸市立筑紫が丘小学校		89	神戸親和女子大学付属親和幼稚園
	67	芦屋市立精道幼稚園		90	兵庫県神崎郡神河町立寺前小学校
	68	芦屋市立岩園幼稚園		91	すずらんホールファミリーコンサート ※1
2016年	69	すずらんホールファミリーコンサート ※1	※1 神戸市北区地域交流の祭典 「すずらんホールファミリーコンサート」 (神戸市北区民センター：すずらんホール)		
	70	淡路市立一宮小学校			
	71	芦屋市立朝日が丘幼稚園			

4. オペレッタ作品の概要

(1) 2017年度児童教育学専門演習Ⅰ・Ⅱにおけるオペレッタ作品について

○作品名：「みならい天使」（出版社：音楽之友社）

- ・原作：青島広志作詞・作曲・台本
- ・脚色／潤色：2017年度児童教育学専門演習Ⅰ・Ⅱ履修生25名
- ・編曲／作曲：伊神ひろみ
- ・指揮／演出／指導：山本裕之
- ・あらすじ：

天国に住むみならい天使の1人が立派な大天使になるために、地上の人間の世界へ旅立つことになりました。立派な大天使になるためには、人間の世界で何かいいことをして来なければならないのです。さて、いいことってどんなことだろう・・・？人間の世界へ旅立ったみならい天使の天国玉夫は小学校に転入することになります。転校生となった玉夫がクラスで出会ったのが不登校気味のひろし君です。玉夫は大天使になるために、なにかいいことをしようとしてひろしが学校に行けるように頑張りますが、それを邪魔しようと悪魔と小悪魔も現れます。

さて、玉夫は無事に立派な大天使になれるのでしょうか。

- ・キャスト：19名、アンサンブル：6名
- ・上演時間：55分

(2) 2018年度児童教育学専門演習Ⅰ・Ⅱにおけるオペレッタ作品について

○作品名：「もも・はな・かぐ・さか物語」(出版社：音楽之友社)

- ・原作：青島広志作詞・作曲 / 東 龍男台本
- ・脚色／潤色：2018年度児童教育学専門演習Ⅰ・Ⅱ履修生25名
- ・編曲：若松正司
- ・指揮／演出／指導：山本裕之
- ・あらすじ：

私たちは森に住む妖精！ なんだか元気のないあゆむ君……。

「僕、夢なんかないなあ……。」

大変！！ このままだとあゆむ君は夢が持てないまま…。

よし、あゆむ君のためにお手伝い開始！

昔話の登場人物のあの人たちに手伝ってもらおう！！

- ・キャスト：19名、アンサンブル：6名
- ・上演時間：50分

(3) 2019年度児童教育学専門演習Ⅰ・Ⅱにおけるオペレッタ作品について

○作品名：「海賊船長の子守唄」(出版社：音楽之友社)

- ・原作：鈴木悦夫作・青島広志作曲
- ・脚色／潤色：2019年度児童教育学専門演習Ⅰ・Ⅱ履修生26名
- ・編曲／作曲：伊神ひろみ
- ・指揮／演出／指導：山本裕之
- ・あらすじ：

力持ちで大きな声が最大の自慢！そして冒険が大好きなジャック船長は、ある日、パパになることを知る！しかし、ジャック船長にはパパになるための「何か」が足りない……。夫人と仲間たちに応援され、素敵なパパになるために冒険の旅に出ることになった船長。冒険の途中、自分に自信を持たず、船長と同じように「何か」が足りない男の子、カイ君と出会い一緒に冒険をすることになったのだが……。

はたして、ジャック船長は「何か」に気づくことができるのでしょうか？！

そして、素敵なパパになれるのでしょうか？！！

- ・キャスト：18名、アンサンブル：8名
- ・上演時間：55分

5. オペレッタ制作の指導計画

(1) キャスト・アンサンブル

- ・希望調査
- ・キャストオーディション
- ・キャスト決定、アンサンブル決定

(2) 脚色を加えた台本作成（6月・7月・8月）

- ・オペレッタの公演意義に繋がる「子どもに伝えたい教育的なメッセージ」を考える
- ・子どもが飽きることなく60分間集中して鑑賞できるように脚色を加え、台本を作成する
- ・キャストのキャラクターを考える
- ・台詞読み合わせ練習

(3) 音楽練習（7月・8月・9月）

《キャスト》

- ・独唱曲があるキャストは、音程やリズム、歌詞を正確に覚え歌唱練習する
- ・独唱曲があるキャストは、前後の台詞と繋がるように表現を工夫し表情豊かに歌唱する
- ・二重唱曲や合唱曲があるキャストは、音程やリズム、歌詞を正確に覚え歌唱練習する
- ・独唱曲があるキャストは、前後の台詞と繋がるように表現を工夫し表情豊かに歌唱する

《アンサンブル》

- ・ピアノ、パーカッション、管楽器、シンセサイザー等の担当を決める
- ・アンサンブルの指揮者となるチーフを決める
- ・スコアから各担当楽器のパート譜を作成する
- ・メロディー、リズム、ハーモニーに気をつけながら各パートを個人練習する
- ・アンサンブル全員で、バランスや強弱に気をつけながら合奏する
- ・幕間の間奏曲を既存曲から選曲し、アンサンブル用に編曲する
- ・間奏曲には、管・打楽器（フルート、クラリネット、トランペット、ホルン、トロンボーン、パーカッション等）の独奏を入れるようにする
- ・演劇の劇的効果を高めるために効果音を作成する

(4) ダンス練習（10月・11月）

- ・ダンスの振付を考える
- ・アンサンブルの伴奏に合わせて、ダンスを踊る

(5) 場面練習・通し練習（10月・11月）

- ・場面ごとにアンサンブルの伴奏に合わせて、キャストが表現を工夫しながら歌い演じる
- ・キャストは、暗転の中で効率よく場면을転換できるように練習する
- ・アンサンブルは、暗転の中でも楽器を演奏できるように練習する
- ・キャスト、アンサンブル合同で、何度も通し練習を繰り返す

- ・キャスト、アンサンブルがお互いに評価し合い、より良い表現となるよう改善を加える
- (6) 合宿、ホールリハーサル、本番（児童教育学科定期演奏会）
- ・合宿は、7月の夏合宿と11月の冬合宿の2回実施（各2泊3日）。学生会館「多目的室」に宿泊し、211教室、212教室、学生会館記念講堂等で練習
 - ・ホールリハーサルは、11月の第4週目の日曜日に実施
 - ・本番は、12月の第1週目の土曜日に実施

6. ゼミ学生によるオペレッタ自主練習

(1) 10月の練習内容

- ・場面を8つに分ける（練習しやすいように）
- ・先輩のオペレッタを鑑賞してセリフや動きの研究
- ・最初の海賊シーン、学校シーンを重点的に練習（台本あり）
- ・歌の練習
- ・下校時のネタ決め
- ・各場面、歌ごとに立ち位置を決める
- ・歌の振り付けの練習
- ・着替えのタイムを計る（時間の遅い早いによって、暗転時の役割を分担するため）
- ・暗転時、だれがどの道具を用意するか担当を決める
- ・最初の海賊シーン、学校シーンをアンサンブルと合わせて一通り通せるように練習（セリフは覚える）

(2) 11月上旬の練習内容

- ・海賊の最後のシーンを重点的に練習
- ・歌の振り付けの確認（動きにキレをだす、覚えて堂々と踊るetc）
- ・児童役衣装決め
- ・暗転時の道具の出し入れの確認（全シーンの暗転だけを練習する）
- ・アンサンブル隊と本格的に合わせ練習（効果音、曲の入りなどをすり合わせる）
- ・先輩のオペレッタを鑑賞してセリフや動きの研究

(3) 11月中旬の練習内容

- ・合宿でのホール練習
- ・先生から指摘していただいた部分を復習
- ・合宿を終えての改善点やこれからの練習内容についてみんなで話し合う
- ・マイクの位置を意識して自分の立ち位置を確認する
- ・気になったところは止めて、お互いにアドバイスし合う
- ・表情、セリフ1つ1つを深める（表情の変化、声の大きさ・トーン、目線を意識）

- ・セリフのテンポを意識して演じる
- ・役になりきる、自分の役の性格をもう一度考えなおす
- ・歌は休符や伸ばし、ブレスなど、細かい部分を意識して歌う
- ・ホール練習では、マイクの位置を意識して話す
- ・暗転時静かに素早く準備する練習
- ・大道具小道具の舞台上の配置場所確定・道具の収納場所の配置確定

(4) 11月下旬（本番直前）の練習内容

- ・ひたすら通し練習
- ・気になったところは何度も繰り返し練習
- ・納得いくまで詰めて練習

7. オペレッタ・ボランティア公演記録写真

1. 2017年度オペレッタ・ボランティア公演

○オペレッタ「みならい天使」



すずらんファミリーコンサート



芦屋市立岩園幼稚園①



芦屋市立岩園幼稚園②

2. 2018年度オペレッタ・ボランティア公演

○オペレッタ「もも・はな・かぐ・さか物語」



すずらんファミリーコンサート



兵庫県神崎郡市川町立川辺小学校

3. 2019年度オペレッタ・ボランティア公演

○オペレッタ「海賊船長の子守唄」



児童教育学科定期演奏会①



児童教育学科定期演奏会②



児童教育学科定期演奏会③

8. 2017年度、及び2018年度児童教育学専門演習Ⅰ・Ⅱ（科目担当教員：山本裕之） 履修生（50名）を対象としたオペレッタ表現活動におけるアンケート調査

(1) 調査の概要

目的：児童教育学専門演習Ⅰ・Ⅱを履修し、オペレッタ表現活動に取り組んだ学生がどのような点に困難を感じたのか、また表現活動を終えてどのように感じたか。何を学び、その学びを今後どのように生かしたいかを調査するためにアンケートを実施した。

対象：2017年度、及び2018年度児童教育学専門演習Ⅰ・Ⅱ履修生：50名

回答者：46名

方法：アンケート（No,1・No,2）による記述調査

内容：選択式（No,1）と、記述式（No,2）の併用でアンケート調査を行った。

(2) アンケートの内容

オペレッタ表現活動におけるアンケート調査（No,1）

実施日：2019.3.9

■キャスト・アンサンブルのどちらを担当したか、○印を付けて下さい。

（キャスト・アンサンブル）

■次の設問に、どれか一つ○印を付けて回答して下さい。

1. オペレッタ表現活動に取り組んで苦労したことや、困難だと感じたことがありましたか。
大いに感じた（ ）、感じた（ ）、あまり感じなかった（ ）、全く感じなかった（ ）

2. オペレッタ表現活動を終えて、皆で協働して一つのものを創り上げる喜びや達成感を感じましたか。
大いに感じた（ ）、感じた（ ）、あまり感じなかった（ ）、全く感じなかった（ ）

3. 幼稚園や小学校、すずらんホールでのボランティア公演を終えて、表現する喜びを感じる事ができましたか。
大いに感じた（ ）、感じた（ ）、あまり感じなかった（ ）、全く感じなかった（ ）

4. オペレッタ表現活動を終えて、歌や台詞、演劇、楽器演奏を通して表現することが好きになりましたか。
大いに好きになった（ ）、好きになった（ ）、あまり好きにならなかった（ ）、嫌いになった（ ）

5. オペレッタ表現活動を終えて、小学校や幼稚園、保育園、認定こども園等で子どもの前に立つ自信に繋がりましたか。

大いに繋がった()、繋がった()、あまり繋がらなかった()、全く繋がらなかった()

6. 将来、教育や保育現場で働くとした場合、子どもたちにオペレッタ表現活動を通して表現する喜びを味わってみたいと思いますか。

大いにそう思う()、そう思う()、あまりそう思わない()、全くそう思わない()

7. オペレッタ表現活動に取り組むことにより、自身の表現力の向上に繋がりましたか。

大いに繋がった()、繋がった()、あまり繋がらなかった()、全く繋がらなかった()

オペレッタ表現活動におけるアンケート調査 (No,2)

実施日：2019.3.9

■キャスト・アンサンブルのどちらを担当したか、○印を付けて下さい。

(キャスト・アンサンブル)

■次の設問に回答して下さい。(自由記述)

1. オペレッタ表現活動に取り組む過程で苦勞した点、困難だと感じた点

2. オペレッタ表現活動を終えての喜びや達成感について

3. オペレッタ表現活動から学んだこと

4. オペレッタ表現活動を終えて今後に生かしたいこと

9. オペレッタ表現活動におけるアンケート調査 結果と考察

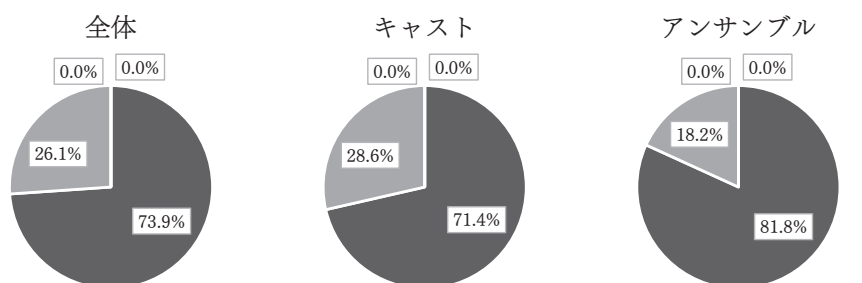
オペレッタ表現活動におけるアンケート調査 (No,1) 結果と考察

■キャスト・アンサンブルのどちらを担当したか、○印を付けて下さい。

(キャスト・アンサンブル)

■次の設問に、どれか一つ○印を付けて回答して下さい。

(1) オペレッタ表現活動に取り組んで苦労したことや、困難だと感じたことがありましたか。



- 大いに感じた (34名)
- 感じた (12名)
- あまり感じなかった (0名)
- 全く感じなかった (0名)

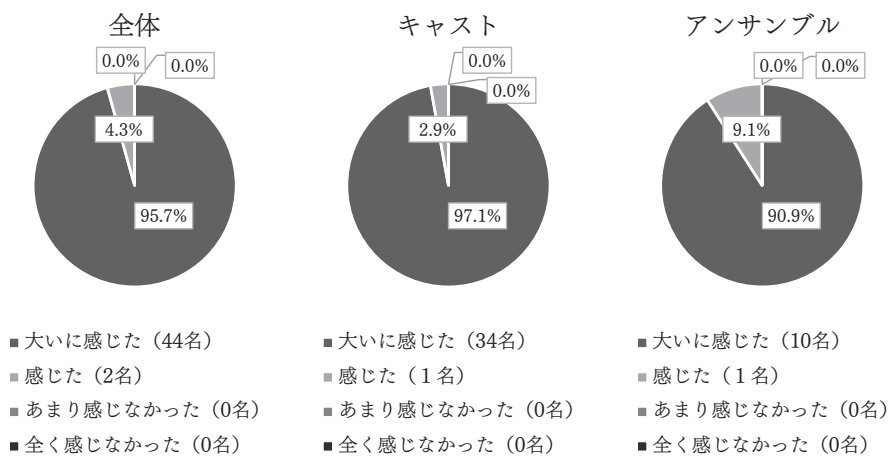
- 大いに感じた (25名)
- 感じた (10名)
- あまり感じなかった (0名)
- 全く感じなかった (0名)

- 大いに感じた (9名)
- 感じた (2名)
- あまり感じなかった (0名)
- 全く感じなかった (0名)

以上の結果から、オペレッタ表現活動においてキャスト・アンサンブル共に約70%を超える学生が様々な課題に直面し、その課題解決に向けて苦労し困難だと感じたことが分かる。

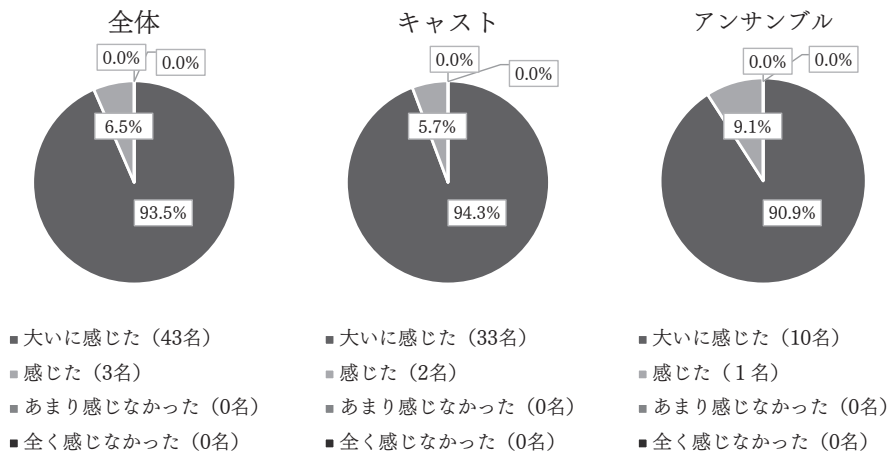
ただし、キャストとアンサンブルとでは約10%の差がある。アンサンブルの方が苦労し困難だと感じたことが多いのは、歌唱曲の伴奏、間奏曲、効果音等の選曲や編曲でかなり苦労したことが理由である考えられる。

(2) オペレッタ表現活動を終えて、皆で協働して一つのを創り上げる喜びや達成感を感じましたか。



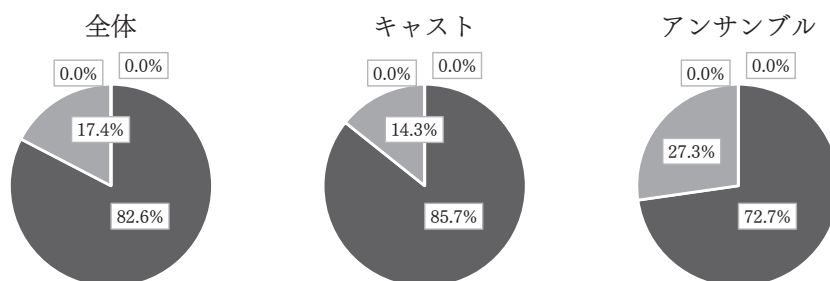
以上の結果から、オペレッタ表現活動においてキャスト・アンサンブル共に様々な課題に直面したが、学生が協働して取り組む中で互いに切磋琢磨することにより、約90%を超える学生が課題を克服し喜びや達成感を大いに感じていることが分かる。

(3) 幼稚園や小学校、すずらんホールでのボランティア公演を終えて、表現する喜びを感じることができましたか。



以上の結果から、オペレッタ表現活動における学校園や地域での公演において、約90%を超える学生が表現する喜びを大いに感じていることが分かる。

(4) オペレッタ表現活動を終えて、歌や台詞、演劇、楽器演奏を通して表現することが好きになりましたか。

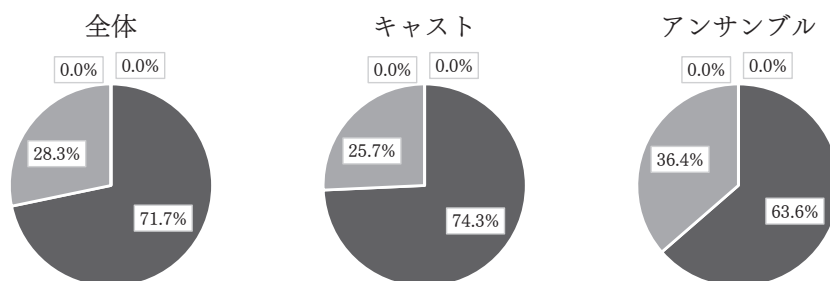


- | | | |
|---------------------|---------------------|---------------------|
| ■ 大いに好きになった (38名) | ■ 大いに好きになった (30名) | ■ 大いに好きになった (8名) |
| ■ 好きになった (8名) | ■ 好きになった (5名) | ■ 好きになった (3名) |
| ■ あまり好きにならなかった (0名) | ■ あまり好きにならなかった (0名) | ■ あまり好きにならなかった (0名) |
| ■ 嫌いになった (0名) | ■ 嫌いになった (0名) | ■ 嫌いになった (0名) |

以上の結果から、オペレッタ表現活動を通して、約70%を超える学生が歌唱・演劇・音楽などの芸術分野において表現することを大いに好んでいることが分かる。

ただし、キャストとアンサンブルでは13%の差がある。歌唱・演劇・ダンスを通して、直接児童や幼児と向き合うキャストの方が、より表現することが好きになるのだと考えられる。

(5) オペレッタ表現活動を終えて、小学校や幼稚園、保育園、認定こども園等で子どもの前に立つ自信に繋がりましたか。



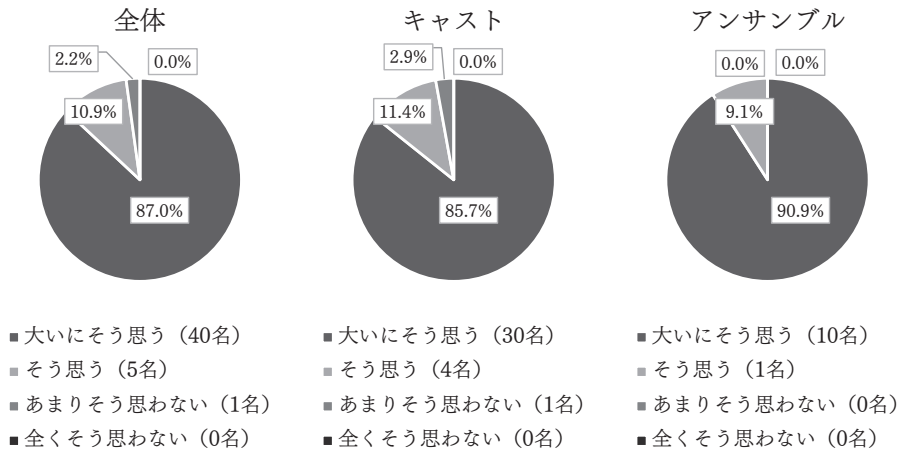
- | | | |
|-------------------|-------------------|-------------------|
| ■ 大いに繋がった (33名) | ■ 大いに繋がった (26名) | ■ 大いに繋がった (7名) |
| ■ 繋がった (13名) | ■ 繋がった (9名) | ■ 繋がった (4名) |
| ■ あまり繋がらなかった (0名) | ■ あまり繋がらなかった (0名) | ■ あまり繋がらなかった (0名) |
| ■ 全く繋がらなかった (0名) | ■ 全く繋がらなかった (0名) | ■ 全く繋がらなかった (0名) |

以上の結果から、オペレッタ表現活動を通して、約60%を超える学生が将来教師や保育士として児童や幼児を指導する上での自信に、大いに繋がっていると感じていることが分かる。

ただし、キャストとアンサンブルとでは約10%の差がある。歌唱・演劇・ダンスを通して、直接児童

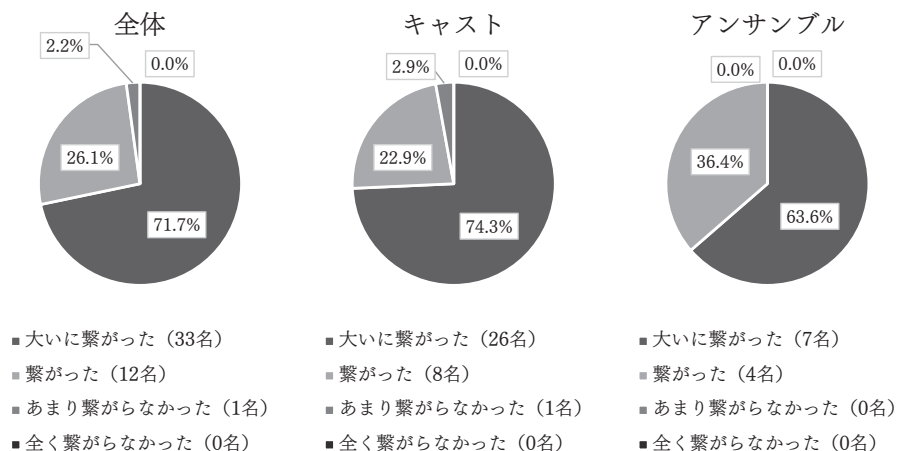
や幼児と向き合う場面が多いキャストの方が、より児童や幼児と向き合う自信につながると考えられる。

(6) 将来、教育や保育現場で働くとした場合、子どもたちにオペレッタ表現活動を通して表現する喜びを味わってみたいと思いますか。



以上の結果から、学生が将来、教育や保育現場で教師・保育士として働く時、約80%を超える学生が、自らが経験したオペレッタ表現活動を児童や幼児にも体験してもらいたいと思うと共に、その表現する喜びも感じてもらいたいと考えていることが分かる。

(7) オペレッタ表現活動に取り組むことにより、自身の表現力の向上に繋がりましたか。



以上の結果から、オペレッタ表現活動を通して、キャストでは74%を超える学生が自身の表現力向上に大いに繋がり、アンサンブルでは63%を超える学生が自身の表現力向上に大いに繋がっている。全体としても、71%を超える学生が自信の表現力向上に繋がっていることが分かる。

オペレッタ表現活動におけるアンケート調査 (No,2) (記述式) 結果と考察

【2017年度3年次生・2018年度3年次生：合計46名による自由記述】

1. オペレッタ表現活動に取り組む過程で苦勞した点、困難だと感じた点

学生による《キャスト》自由記述のアンケート結果を、その内容から以下の3つのカテゴリーに分類し紹介する。

(1) 表現力の向上

(2) 協働して取り組む難しさ

(3) オペレッタに込めたメッセージを子どもたちにどのように伝えるか

《キャスト》

(1) 表現力の向上

- ・私自身、今までに演劇をした経験がなく、なかなか自分の殻を破れず自分を表現することができなかった。特に、児童の役のキャラクターを表現することが難しかった。しかし、お互いが演技を観たり、気づいた点を助言し合うことで、より良い表現に改善することができた。
- ・児童の男子役になりきることに苦勞した。髪の毛を短く結び、歩き方や振る舞い、椅子に座ったときの足の開きなど、常に意識をして演じることに苦勞した。
- ・人に自分の思いを伝えることの難しさを感じた。当然のことではあるが、自分自身が役に入り込み、役のキャラクターに合った動きや話し方を意識した。そうすることで、台詞の言葉の中にしっかりと感情を込めることができるのだと学んだ。
- ・苦勞した点は、自分自身の表現の仕方だ。今までは楽器で表現してきたが、歌やセリフで表現するのは初めてだった。どのように表現すれば伝わるのか。先生にご指導頂いたが、練習時は鑑賞者がいないので本当に伝わっているのかどうか分からず、慣れない分野での表現に苦勞した。
- ・役のイメージ作りや、理想と実際に演じてみる場合とのギャップにとまどった。
- ・児童役では男の子役を演じたのだが、性別を演技で変えるというのは思ったより難しく自分の思うような演技ができず、悔しい思いをしたときもあった。自分の中にちゃんとイメージはあるのに、それを体と声と心で表現することが難しいと感じた。
- ・甲高い声を出す少しコミカルな悪魔役を演じた。地声で喉を詰めた声を出していたため、上手く自分の声をコントロールすることが出来ず発声に苦勞した。
- ・舞台の前の方の人だけではなく、後ろに座っている人にも届けること。役になりきり、少ないセリフに意思を吹き込むこと。他のキャストの人とのセリフの間の取り方や、立ち位置の調整。セリフや、振り付けがない時の振る舞い。
- ・おとなしい男子役だったので、男子の行動や仕草を入れつつやんちゃな感じを控えめにするのが難しかった。また、私は将来の夢を持つのが早かったが、主人公役のまさと君は夢を持つことができない役だった。まさと君の夢が大切だと思えない気持ちが分からなくて苦勞し

た。その他にも様々な課題があった。1番大切にしかかった台詞、だかこそ迷って考え抜いた最後のセリフ。みんなで創った1時間の作品を締めくくる私の台詞で全てが決まるからこそ、プレッシャーもかなりあったが、私の思いを込めて演じた。

- 苦労したのは、児童などのダンスシーンだ。児童キャストの中でグループに分かれてダンスを考えたが、舞台の状況や場面に合った動き方を考えることがとても難しく感じた。ただ、苦労した分観客から賞賛の声をもらえてとても達成感があった。もう1つ取り組みで苦労した点は、演技での面白いシーンを考えることだ。どうしたらお客様に面白いと思ってもらえるか、笑いを取れるか必死で考えた。児童の場面では、全員で笑いを取れるか、内輪だけのネタにならないかを何度も話し合い、その結果が本番での成功に繋がった。皆で考えた所で笑いを取れた時、舞台裏で皆とハイタッチし飛び上がって喜ぶことができた。
- 今まで人前で演技をするという機会がほとんど無かったので、最初は役に馴染むことがなかなかできなかった。児童役は一人一人の個性を強く出さないと面白味を感じることができないと思い、自分の役はどういうキャラなのか、どういう口調でセリフを言えばいいのかなど、演じる前に分析をすることがとても重要だと感じた。もう一点苦労したことは、歌の振り付けだ。児童役は全部で6曲の振り付けを考えた。歌詞に合わせてどんな振り付けをしたら伝わりやすいか、より曲の良さを引き立てるにはどんな振り付けがふさわしいか、たくさんのアイデアを出しながら作成した。かなり時間をかけたことで、皆が納得のいく振り付けができた。

(2) 協働して取り組む難しさ

- ゼミ生全員のオペレッタに対するモチベーションを同じにすることである。夏休みの練習にあまり来ない人がいれば、練習や道具を作るために来ている人が馬鹿らしいと感じる時があった。「何の為にやっているのか」と思うことも度々あった。オペレッタが完成した時はみんなで喜び、泣いたこともあったが、その事が頭をよぎると感動が薄れてしまった。練習があることを理解してゼミに入っているはずである。入ったからにはきちんとやって欲しいと思った。
- 私が、オペレッタ表現活動で難しいと感じた点は2点ある。1点目は、25人で1つの作品を作ることだ。25人は、一人ひとりが作品に対しての思いが異なり、シーンを演じるにあたって、意見の違いがあった。しかし、皆が意見を交換し合うことで、より作品を深く考えるきっかけになった。多様な考え方や思いを共有することができた。2点目は、アンサンブルとキャストで合わせる際に、効果音の間や、挿入曲に入る間、場面転換の際の入り方などを、キャストとアンサンブルで合わせることだ。練習を重ねるごとに、台詞が変わったり、動きが変わったりするので、アンサンブルがキャストに合わせてくれる形であったが、練習を重ねるごとにキャストの動きに合わせて効果音を提案してくれ、とても良いものが創れるようになった。

(3) オペレッタに込めたメッセージを子どもたちにどのように伝えるか

- オペレッタ表現活動に取り組んで特に苦労した点、困難だと感じた点は、50分間という時間の中でどうすれば見ていただく方や子ども達に夢をもつことの素晴らしさや大切さが伝わる

かを考えることであった。ただ自分達がしたい演技や演出をするだけなら考えることにさほど困難は感じないが、伝えたい人にどうすれば伝わるのかというのは困難だと感じた。

- ・オペレッタでは、妖精役と先生役を演じた。出番があまり多くない中でどのように「夢をもつ大切さ」を伝えるかという点に困難を感じた。
- ・困難に感じた点は以下の3つである。伝えたい思いを上手に伝えるように工夫すること。夢を持つことにどんな意義があるのかを自分なりに解釈すること。表現の仕方や表情の作り方。

《考察》

上記の3つのカテゴリーの中でも、特に、(1)「表現力の向上」について記述している学生が多い。キャストは、演技、台詞、歌唱、ダンス等、すべての面で卓越した表現力が求められる。演劇として表現する場合、学生は動もすると頭で考え形から入ろうとするが、最も大切なことはその時のキャストの心情・想いである。どのようなキャラクターの人間が、どのような状況で、どのような動機からその台詞を話し演技するのか。その根本的な部分が欠如しては上辺だけの表現になってしまう。観客の心に響く演技や歌唱には、キャストの内面にある心情が吐露されなければならない。演劇やミュージカルの経験がない学生にとってはかなりの困難を伴うが、繰り返し練習することにより役になりきって演技できるように成長していく。その過程で苦労したことや困難に感じたことが多いと感じている学生が多いことが分かる。

次に、(2)「協働して取り組む難しさ」である。学生の中にも当然考え方や価値観の違いがある。その違いを一つの方向にまとめていくには、根気よく議論し対話を重ねることが大切である。お互いが理解し合い納得して一つの方向に向かっていけば、それが表現する大きな力となり、観客の心に響くオペレッタを創り上げることができる。協働して取り組む難しさを感じている学生は多いが、学生時代にチームとして協働して取り組んだ経験は今後社会で大いに活かされると考える。

最後に、(3)「オペレッタに込めたメッセージを子どもたちにどのように伝えるか」である。台本の中に書き込まれている台詞を話し演じているだけでは、とても子どもの心に響くようなオペレッタを上演することはできない。学生が考えたメッセージをどのように表現して伝えるのか。このことはオペレッタを公演する意義にも繋がることである。学生一人ひとりが真剣にオペレッタに向き合い自問自答することにより、その意義を見出している。

学生による《アンサンブル》自由記述のアンケート結果を、その内容から以下の2つのカテゴリーに分類し紹介する。

(1) 表現力の向上

(2) アンサンブルメンバー同士の連携

《アンサンブル》

(1) 表現力の向上

- ・アンサンブル隊でパーカッションを担当した。一番苦労したのはドラムの演奏だ。バチすら

握ったことのない初心者だったので、まず楽譜を読むところからのスタートだった。加えて、オペレッタ中の音楽（主要キャラクターの登場音や歌の伴奏）は楽譜がなく、ドラムの楽譜については自分で作曲した。ゼミの打楽器専攻の友人の助けがとても大きく、この困難を乗り越えることができたと思う。

- ・公演ごとに会場が違い音の響きも違ったので、各楽器の音量やバランスを考えることに苦労した。また、アンサンブル6名全員で息を合わせて演奏することも難しかった。初めはお互いの音を聴き合うことができなかつたり、音の厚みが足りなかつたりして、うまくいくまでにはかなりの時間を要した。
- ・アンサンブルとして活動に取り組む中で、楽器を通して表現することの難しさを感じた。スコアの楽譜から3rdシンセサイザーの音を拾い上げる作業にとっても苦労した。また、夏休みには楽譜のない曲やプラスの曲を編曲する作業もとても大変だった。さらに、公演のたびに音量やバランスを調整することにも苦労した。

(2) アンサンブルメンバー同士の連携

- ・特に困難だと感じた点は曲の編曲だった。どのパートがどこを弾くのか、楽譜がないものもあったのでYouTubeなどを活用して考えた。それでも実際に合わせて演奏すると音色が少なく感じたり、うまく噛み合わなかつたりと何度も苦戦した。また、6人で息を合わせ1つの音楽にすることの難しさも感じた。音量のバランスや、音の厚みを出すことなど多くの困難さを感じた。
- ・ただ単に演奏するのではなく、アンサンブルの6人で息を合わせ、キャストの動きを見ながら演奏し、オペレッタを創り上げていくというところがアンサンブルの難しいところだった。また間奏曲や効果音など、楽譜がない曲は自分たちで編曲し、楽譜を作成するのが苦労した点である。

《考察》

アンサンブルにおいてもキャストと同様に、2つのカテゴリーの内、特に、(1)「表現力の向上」について記述している学生が多い。

アンサンブルでは、パーカッション（打楽器）、ピアノ、シンセサイザー、管楽器（フルート・クラリネット・トランペット・ホルン・トロンボーン・サクソ等）の演奏スキルが求められる。特に初心者であれば、演奏できるようになるまでにはかなりの努力が必要である。その個人の演奏スキルアップにかなりの困難を感じている。さらに、(2)の「アンサンブルメンバーとの連携」も大切である。リズムやテンポ、ハーモニーが合わなければ、キャストと一体となったオペレッタ演奏は無理である。キャストとは、また少し違った面で苦労したようである。

2. オペレッタ表現活動を終えての喜びや達成感について

学生による《キャスト》自由記述のアンケート結果を、その内容から以下の2つのカテゴリーに

分類し紹介する。

(1) 仲間とともに協働することによる創り上げる喜び、達成感

(2) 子どもたちへのメッセージを届けることができた喜び、達成感

《キャスト》

(1) 仲間とともに協働することによる創り上げる喜び、達成感

- ・私は終わった喜びや達成感よりも、もうこの作品を仲間と演じることができないことに寂しさや悲しさがこみ上げてきた。それだけ思い入れのある作品であり、仲間と一から創り上げた作品であった。仲間と共に最後までやりきったことに対して達成感をとても感じた。
- ・オペレッタ練習は毎日夜遅くまでありとても大変であった。しかし、皆で一つのを創り上げていくことに喜びがあったし、多くの人に喜んでもらえるという達成感があった。また、表現をすることは恥ずかしく思っていたが、練習を重ねる度にどんどん楽しくなっていた。そう思えてきたことに大きな喜びを感じた。
- ・みんなで1つの作品を作り上げることへの喜びと達成感が大きい。日に日に自分のイメージする役に近づいていくことが嬉しかった。お客さんの反応があり、とても嬉しかった。
- ・25人で1つの作品を創ることで、作品からも、そして練習時からも、仲間1人ひとりの大切さを学び、ともに頑張れること、一緒にいられること、意見を出し合える関係であることに喜びを感じられた。定期演奏会では、そのときの自分たちの精一杯を出し切ったが、そこで終わりではなく、オペレッタ公演に向けて、1人ひとりがさらに作品と真剣に向き合い、役に向き合ったことで、作品で伝えたい「夢」の大切さについて考えを深めることができた。オペレッタ公演で保護者の方や子どもたちから「夢」についての感想をたくさんもらうことができ、私たちが伝えなかった、「夢」の大切さを伝えることができたと感じた。
- ・ゼミの仲間と協働し一つの作品を創り上げることができたことが喜びである。台本に流行曲を取り入れたり、踊りを入れたり脚色し、私たちの独自の作品を創り上げようと常に向上心を持ち取り組んだ。その結果、大きな達成感を得ることができた。
- ・仲間と協力し、やり遂げることの喜びを感じることができた。意見を言いにくい仲間とも積極的に話をし、その話を全体へ発信することを心がけた。そうすることにより、お互いの良さを認め合い、意見を出し合える環境を作り上げることができた。その環境のお陰で、創り上げたオペレッタがより良い作品になり、皆で協働して1つのものを創り上げる達成感を味わうことができた。
- ・みんなで何かひとつのものを創り上げる喜びを感じた。自分が一生懸命に表現すると、それを子どもたちも子どもたちなりに受け止めてくれたので、表現する喜びを感じることができた。何度もセリフを練習して、皆で合わせて、動きやセリフの間を考え直して、という作業を何度も繰り返し、練習を重ねて創り上げたオペレッタを公演し拍手をいただいた時に大きな達成感を感じた。

- ・練習を始めた頃はあんまりゼミ生の皆と馴染めなかったが、オペレッタ表現活動を通して仲間と創るからこそその達成感や喜びを感じることができた。それも練習を重ねながら皆で意見を出し合い、時にはぶつかりながらも協働して創り上げることができたからこそだと思う。
- ・ゼミの皆と団結して最後まで駆け抜けることができたことをとても嬉しく思う。ゼミに入る前は名前すら知らなかった人もいたが、オペレッタの練習を通して全員と少しずつ話せるようになり、役が決まってからは真剣な話し合いもたくさんした。正直、練習が辛い時もあったが、誰も手を抜いていないということが何よりの心の支えだった。皆がオペレッタに対して真摯に向き合ったからこそ、私も向き合うことができた。観客からも良い評価を頂き、公演するにあたってのエネルギーとなった。
- ・一年間かけてオペレッタを創り上げることができたのは、25人の仲間の絆があったからだと思う。一人一人がいろいろな葛藤を抱えながらも、お互い支え合いながら毎日練習に励み、その日々の中で絆を深めることができた。定期演奏会でオペレッタを披露した時は、この仲間と毎日頑張ってきて良かったと心の底から思った。自分一人では絶対に創り上げることはできないし、このオペレッタを通して思いやりの心を持つことや、仲間の大切さを感じることができた。この経験は私にとって一生の財産となった。

(2) 子どもたちへのメッセージを届けることができた喜び、達成感

- ・各学校園によってオペレッタを観る子どもの反応も一人ひとり違い、素直な子どもの反応を肌で感じる事ができた。公演中に、子どもが笑う姿や子どもが怖がる姿にも触れ、演じる側の気持ちが伝わった喜びとともに大きな達成感も感じる事ができた。
- ・オペレッタを初めて先輩の前で披露した時だ。私の中では満足のいくオペレッタではなかったが、先輩が感動してくださった時には思わず涙が溢れた。初めて、観客として観てくれる人がいたので、「こんなに夢って素晴らしいよ」と伝えよう、また「私たちのオペレッタはこんなオペレッタになったよ」と伝える事に必死だった。
- ・それぞれのシーンでの観客席からの反応や笑い声があった時に大いに喜びや達成感を感じた。それを感じた時は、私たちが伝えたいことを伝えることができたと思い、舞台裏でみんなで笑い合ったりハイタッチしたりしたこともあった。また、私たちのオペレッタを見て涙を流してくださる方や、感動してくださった方を見た時も、言葉にならないような達成感を感じることができた。
- ・仲間と一緒にオペレッタを創り上げ、それを子どもたち、保護者や先生方に鑑賞して頂き、鑑賞者の皆さんの心に何か響くものを創ることができたことが、私たちの喜びとなり大きな達成感につながった。
- ・公演では、観客がいることで直ぐに反応が返ってきた。自分たちだけの一人よがりな舞台ではなく、観客と常に対話しているように感じられ、観客と一体となった舞台を創り上げたという喜びを感じた。さらに、ゼミの仲間と力を合わせ一つのことに打ち込むことでゼミ生同士の絆

が深まった。各自がオペレッタでの役割を果たし、自信を持って表現することに繋がった。

《考察》

(1) 「仲間とともに協働することによる創り上げる喜び、達成感」について

オペレッタは前述した通り総合芸術である。当然、一人で努力して創り上げるものではなく、協働して取り組むことで創り上げることのできる芸術である。個々の力を結集することにより到底一人では成し得ない大きな力となり、観客の心に響く素晴らしい演奏となる。それだけに作品を創り上げたときの喜びは計り知れず、大きな達成感に繋がる。

このような体験が教師として教壇に立ったときの自信に繋がることを確信している。

(2) 「子どもたちへのメッセージを届けることができた喜び、達成感」について

表現することは、より良いコミュニケーションに繋がる。表現者の一方通行ではなく、鑑賞者との双方向の心のキャッチボールが行われてこそ、初めてコミュニケーションが成立する。歌唱、アンサンブル演奏、演劇、ダンスを通してのコミュニケーションは、表現者、鑑賞者共に大きな感動を得ることができる。

学生は、オペレッタを通して子どもたちに真剣に向き合いメッセージを伝えようと必死に演じるが、公演が終わってみれば逆に鑑賞者である子どもたちからたくさんの感動を得ているのである。オペレッタ表現活動を通して、真のより良いコミュニケーションの取り方を学生は学んでいる。

学生による《アンサンブル》自由記述のアンケート結果を、その内容から以下の2つのカテゴリーに分類し紹介する。

(1) 仲間とともに協働することによる創り上げる喜び、達成感

(2) 子どもたちへのメッセージを届けることができた喜び、達成感

《アンサンブル》

(1) 仲間とともに協働することによる創り上げる喜び、達成感

- ・アンサンブルはオペレッタの良し悪しを決めたいへん重要な役割であり、一つ一つの公演を大事に演奏することを心がけた。未経験のドラムに挑戦したことに対して、当初は本番を迎えられるか不安な気持ちでいっぱいだったが、こうしてすべてのオペレッタ公演を終えた今では、あの時ドラムに挑戦すると決意して本当に良かったと思う。
- ・子どもたちからオペレッタの内容や挿入曲に対して反応が返ってきた時はとても嬉しかった。また、25人全員で1つになり表現できる喜びや、それを観客に観てもらえる喜びを感じた。うまくいかないことも沢山あったが、一つ一つの公演を終えるたびに達成感を感じることができた。

(2) 子どもたちへのメッセージを届けることができた喜び、達成感

- ・私たちが編曲した曲や挿入曲として選んだ曲に、子どもたちからの反応が返ってきた時は、

しんどい思いをして夏休みの頑張った努力が報われたように思い、達成感を感じることができた。また、キャストとは違い言葉で表現することはなかったが、終わった後にキャストから「オペレッタを盛り上げてくれてありがとう。」との感謝の言葉ももらった。アンサンブルを担当して良かったと達成感と喜びを味わうことができた。

- ・うまくいかなかったことはあるが、それ以上に観客の反応が直に返ってくる喜びを感じることができた。それは私にとって初めての体験であった。表現しそれが評価される喜びを感じ、今まで皆で取り組んできて良かったと達成感も感じることができた。
- ・様々な方に私たちのオペレッタを見ていただくようなことが、今後はもうないのだと思うと寂しい気持ちである。しかし、子どもたちをはじめ多くの人に、「仲間の大切さ」、「夢を持つことの素晴らしさ」など、私たちが子どもたちに伝えたかったメッセージを伝えることができたと思う。とても嬉しい気持ちと大きな達成感がある。

《考察》

(1) 「仲間とともに協働することにより創り上げる喜び、達成感」について

キャスト・アンサンブル共に、協働して取り組むことにより、大きな達成感を得ていることが分かる。このような体験が教師として教壇に立ったときの自信に繋がると確信している。

(2) 「子どもたちへのメッセージを届けることができた喜び、達成感」について

キャスト・アンサンブル共に、オペレッタを通して子どもたちに真剣に向き合いメッセージを伝えようと必死に演じ演奏しているが、公演が終わってみれば逆に鑑賞者である子どもたちからたくさんの感動を得ているのである。オペレッタ表現活動を通して、真のより良いコミュニケーションの取り方を学生は学んでいる。

3. オペレッタ表現活動から学んだこと

学生による《キャスト》自由記述のアンケート結果を、その内容から以下の2つのカテゴリーに分類し紹介する。

(1) 仲間とともに協働する大切さ、自信を持って表現することの楽しさ

(2) 仲間への感謝の気持、仲間の大切さ

《キャスト》

(1) 仲間とともに協働する大切さ、自信を持って表現することの楽しさ

- ・仲間とともに1つのオペレッタを創り上げることで、誰1人とかけてはならない仲間と協働する大切さを感じることができた。オペレッタでは「夢を持つことの大切さ」を子どもたちに伝えることを大切にしてきたが、私自身が実際に仲間と協働する大切さや夢を持つことの大切さをとても感じることができた。また、音楽には言葉で伝えることができない感動や思いを鑑賞者に伝えることができるのだと改めて感じることもできた。オペレッタでは、自分を

表現することの大切さも学んだ。

- オペレッタを通じて、表現することの楽しさや仲間への思いやりの大切さ、音楽の楽しさを学ぶことができた。最初は表現をすることが恥ずかしくできないと思っていたが、公演を重ねるごとに子どもたちの反応を楽しめるようになり、演ずる喜びを感じた。音楽や演劇を通して人を感動させることができると実感できた。改めて表現することの喜びを感じるようになった。
- 物語を通して相手に思いを伝えるということの難しさを感じた。口で台詞を伝えるだけでなく、役になりきり、自分自身が何を伝えたいのかと言う思いをしっかりと持つことが、オペレッタ表現活動をする上で大切なのだと学んだ。
- オペレッタ表現活動から学んだことはたくさんある。最初は「オペレッタから何を学ぶのだろうか」、表現する技術かなと思っていた。しかし、その技術はもちろんのこと、自分を表現することの大切さ、仲間と共に1つのもを創り上げる素晴らしさ、周りの人を大切に思う気持ちなど様々なことを学ぶことができた。オペレッタのテーマである「仲間の大切さ」、「思いやりの心」、「愛の大きさ」など言葉では表せないものを表現するというのは大変難しかった。役になりきり伝えるということで、役が代弁してくれているように感じ、とても表現しやすかった。特に、私がオペレッタ表現活動で大切にしていたことは、「誰に対して何を伝えたいのか」ということだ。公演では、幼稚園児・小学生・先生・保護者と様々な人に伝える機会があった。子どもからの感想を読んだ時や、保護者の方からの感想を伺った時は、私たちのメッセージがきちんと伝わっているという喜びを感じるようになった。また、オペレッタ公演をという場を与えてくださった先生方に、心より感謝しなければならないと思った。照明や運搬で来てくれた後輩たちにも感謝しなければならない。人に感謝するという大切さも学んだ。そして、何よりもこのオペレッタ公演を企画し、常に支えてくださった指導教員にも感謝の気持ちでいっぱいである。
- 一生懸命に取り組むと、そのことは必ず相手に伝わるということ。仲間と協働することの大切さ。自分を表現することの大切さ。
- このオペレッタから学んだことは、「自信」である。オペレッタの練習を始めたころは、自分を表現することに不安な気持ちがあったが、練習や本番を積み重ねていくことで、自信を持って自分を表現することができた。
- 自分を表現することの楽しさを学ぶことができた。最初は、皆の前で役を演じることや、注目される瞬間がとても恥ずかしかった。しかし、練習を重ねるにつれて、恥ずかしさより自分を見てほしいと思うようになった。動画を見ながら悪い部分を直したり、セリフや動きを変えたり、自分でいろいろと表現を工夫した。将来、保育教諭となった際に、このオペレッタ表現活動を子どもの表現活動に大いに活かしていきたいと思う。
- 私たちのオペレッタの内容は「夢の大切さ」である。自分たちも演じながら夢のために頑張っ

ていることを思い浮かべ、日常生活と重ねることもありオペレッタから勇気をもらうこともあった。表現するという事は、必ずしも正解や限界があるものではない。常に向上心を持って取り組むということが大切だと感じた。そして、一人よがりの表現ではなく、観客と対話するように常に相手を意識し、相手の心に響くように表現することが大切だと学んだ。

- ・自分の意見を持ち伝えることの大切さ。仲間と協働し、ひとつのものを創り上げる楽しさ。自信を持って堂々と表現すること。自分を客観視することの大切さ。

(2) 仲間への感謝の気持、仲間の大切さ

- ・様々な表現方法である。セリフもただ大きな声を出すだけでなく、抑揚をつけたり身振りや手振りを交えながら視線を観客の目と合わすことで、鑑賞者と一体感を持つことができると学んだ。また、仲間への感謝の気持ちを忘れないことも学んだ。ゼミ生への感謝の気持ちと尊敬の念でいっぱいだ。
- ・元来、演劇が好きでよく観に行っていた。高校では演劇科で3年間学び様々な舞台を経験してきたが、今回のように主役を演じるのは初めての経験だった。1人では絶対にできないが、ゼミの皆がサポートしてくれたので演じることができた。このオペレッタのキーワードは、「仲間の大切さ」「思いやり」「愛の温かさ」である。私たちが子どもたちに伝えたいメッセージであるが、逆に私たちが改めて学ぶことができたキーワードでもあった。
- ・相手にメッセージを伝えるためには誠実に取り組む気持ちが大切だと改めて学んだ。伝えるための表現を学べたことが、今回のゼミ活動で一番印象に残っていることだ。
- ・オペレッタ表現活動を通して、仲間の大切さを強く感じた。台本作り、衣装作り、歌の振り付け、アンサンブル、一人では絶対にできないことだ。25人が一つのことを創り上げるには一人一人が良い作品にしようという意識を持ち、責任を持って活動に取り組むことが大切だと思った。皆がいろいろな意見を出し合い、私たちだけのオペレッタを創りたいという思いがあったからこそ、素敵なオペレッタを創り上げることができたと思う。協働する仲間を持つことの素晴らしさを学んだ。

《考察》

(1) 「仲間とともに協働する大切さ、自信を持って表現することの楽しさ」について

前述の2. の記述アンケート《キャスト》と同様に、学生は仲間とともに協働することにより創り上げる喜び、達成感を味わっただけでなく、協働する大切さや表現することの楽しさも学んでいることが分かる。社会に出れば、一人では解決できない課題もたくさんある。そのようなときにこそ、仲間とともに互いに切磋琢磨しながら協働することにより創り上げたオペレッタ表現活動の経験が大いに活かされると確信している。

(2) 「仲間への感謝の気持、仲間の大切さ」について

お互いが相手を尊敬し思いやりながら取り組むことで、良好な人間関係を築くことができる。そのような人間関係の中で、仲間への感謝の気持が醸成されているのが分かる。

学生による《アンサンブル》自由記述のアンケート結果を、その内容から以下の2つのカテゴリーに分類し紹介する。

(1) 仲間とともに協働する大切さ、表現することの楽しさ

(2) 表現を通して伝えたいことが相手に伝わる喜び

《アンサンブル》

(1) 仲間とともに協働する大切さ、表現することの楽しさ

- ・練習を重ねるごとに、オペレッタの演技や音楽が進化していくのを感じた。本番直前まで全員で意見を出し合い、形にしていく中で、表現の奥深さを学ぶことができた。表現にゴールはなく、改善する意識を持ち続けることで表現はどんどん進化していけるのだと確信した。
- ・仲間と協働してやり遂げる喜びを学んだ。オペレッタ表現活動は、1人ではできない。25人全員で協力したからこそ、やり遂げることができた。また、自ら積極的にやることを見つけ、それに対して粘り強く頑張ることが大切であると学んだ。
- ・皆で創り上げることは本当に難しいものだ。しかし、仲間と協力して物事をやり遂げることの喜びを感じることもできたと思う。オペレッタ活動があったからこそ、仲間との絆も深まり、今まで以上に信頼しあえる仲になった。皆で1つの目標に向かって進むことの難しさも感じたが、目標が同じだからこそお互いを高め合う関係になれるのだと改めて学ぶことができた。

(2) 表現を通して伝えたいことが相手に伝わる喜び

- ・人に伝えることの難しさを知った。自分が一生懸命やっているつもりでも、観客にはそこまで伝わらないこともある。自分の限界を越えて努力することでやっと伝わるということがわかった。表現を通して人に伝えることがこんなにも難しいことだと改めて感じた。皆で何か1つのもを創り上げる喜びを味わうことができたと同時に、鑑賞者にその表現を受け入れてもらえることもとても幸せなことであると感じた。
- ・伝えたいことを、どのように表現すれば観てくださる方々に率直に伝えられるのか。このテーマを先生にご指導頂きながら皆で考えることが数多くあった。伝えたいことを強調するために、演じる側の1つ1つの動きや表現を工夫したり、アンサンブルでは音量の強弱や音色、バランスを意識し、場面にふさわしい環境作りを大切にされた。その過程から、様々な表現方法があり、伝え方次第で多くの人に感動を届けることができるということを知った。

《考察》

(1) 仲間とともに協働する大切さ、表現することの楽しさ

(2) 表現を通して伝えたいことが相手に伝わる喜び

キャスト・アンサンブル共に、(1)、(2) について同じ思いを抱いていることが分かる。

4. オペレッタ表現活動を終えて今後に生かしたいこと

《キャスト》

(1) 子どもたちに表現することの楽しさ、素晴らしさを伝えたい

- ・将来、実際に保育現場に立った際には、表現活動や音楽活動に力を入れ、子どもたちに音楽の楽しさや、自分を表現する喜びを味わってもらえるような言葉がけや取り組みをしていきたいと思った。
- ・保育を通じて、子どもたちに表現をすることの楽しさを伝えることである。自分が心から表現活動を楽しめるようになったので、恥ずかしがる子どもも多いと思うが、表現をすることを通して自分に自信を持てるような自己肯定感の向上に繋がればと思う。また、子どもが仲間と協力して一つのことを創り上げる喜びを感じることができるよう保育を目指したい。
- ・このオペレッタの経験を、保育者となった時の生活発表会の表現活動の場面で大いに生かしていきたい。自分とは違う役を演じることの喜びを、ぜひ子どもたちにも味わってほしい。
- ・オペレッタ公演において、保護者の方が感動してくださったのには大変驚いた。「明るくてキラキラしていて、元気を貰いました」という言葉も頂戴した。若いからこそ、健康で元気に取り組めることに感謝したい。この若いということは母も言っていた。すずらんファミリーコンサートを祖母と母で観に来てくれたが、「おばちゃんのコーラス隊の歌を聞くことが多かったけど、あなたたちのほうがフレッシュ感や瑞々しさがあって綺麗ね！」と褒めてくれた。4月からは特別支援学校の教諭となる。学校では一番若い存在になる。元気さや明るさを忘れずに、常にチャレンジする気持ちで取り組みたいと思う。
- ・保育現場での音楽会や生活発表会などで、子どもが自分を表現することを楽しんでもらうために、どのように取り組めばよいかを学ぶことができた。今後活かしたいと思う。
- ・私は幼稚園教諭になったら、生活発表会や運動会のダンスなどで子どもたちに表現活動の素晴らしさを教えたいと強く思った。子どもたちが自己を表現することを心から楽しんでもらいたいと思う。
- ・オペレッタ表現活動に取り組んだ経験を活かし、将来保育者となった時には、音楽や劇あそびで自由に表現する楽しさを子どもたちに伝えていきたい。子どもが自分の思いを表現し、その表現を観た子どもがさらに様々な表現を工夫するような環境を作りたい。
- ・私たちのオペレッタでは夢がテーマである。夢というものについて改めて考えさせられた。夢を持つことはその目標に向かって頑張る力になることを学んだので、そのことを小学校現場で子どもたちに伝えていきたい。
- ・今回の経験を生かして、子どもたちに表現することの素晴らしさを伝えたい。私は施設の保育士になるのが夢である。施設の子どもたちが家庭のような雰囲気の中で、歌を歌ったり、劇あそびをしたり、手遊びが毎日たくさんできるようにいろいろな歌や物語などを覚えていきたい。

(2) 児童、保護者、お客様とのコミュニケーションの取り方

- ・人前に立ち、表現活動を通して学んだことが2つあった。1つ目は観客の方との間の取り方を

知ることができた。私はこのことを活かし、児童や保護者の方の反応を意識しながら話し方を変えたりすることができるような柔軟な対応ができる先生になりたいと思った。2つ目は目線の使い方を学ぶことができた。どのような目線の運びをすれば自分に集中してもらえるのか、どのような雰囲気になるのかということを普段から意識して、先生として教壇に立ちたいと思う。

- ・ 今後に生かしたいことは、まずは来月に控えている特別支援学校の実習である。この実習で、子どもたちの前に立ってオペレッタ表現活動で培った「自信」を持ち授業を行ったり指導をしたりしていきたいと考えている。また、社会に出てからは人と関わる仕事に就きたいと思っているので、自信をもってお客様に接し、楽しく働き続けていきたいと考えている。

(3) オペレッタで培った豊かな表現力を保育に活かしたい

- ・ オペレッタを通して、以前より人前に出ることへの苦手意識が改善されたように感じた。表現することの楽しさを自分が感じたように、子どもたちに伝えるには、保育者である自分が表現を楽しむことが何よりも大切だと学んだ。今後、実習や実際の保育現場での保育でも、律動や歌を歌うことなどの表現遊び、また絵本の読み聞かせなどをすることがあると思う。オペレッタで培った豊かな表現力を活かし、常に向上心を持って保育に取り組んでいきたい。

(4) 自分の意見や考えを伝えることの大切さ

- ・ 自分の考えや意見を伝えることが大切なことであると学んだので、今後は社会人として、この経験を生かしていきたい。

(5) 伝えることの楽しさと、伝わることの感動を子どもたちに届けたい

- ・ ゼミに入るまでは、学芸会レベルの劇しかしたことがなく、最初はついていけるか、きちんと演技できるか心配だった。オペレッタを通じて、心を込めて伝えようとしたことは必ず相手に届くものだということを実感でき、練習を続けてきてよかったと心から思った。これから就職して、毎日子どもたちと接することになる。思っていることを伝えるための表情や言葉がけなど、オペレッタ表現活動で学んだ感動を子どもたちとも共有したいと思った。伝えることの楽しさと、伝わることの感動を子どもたちに届けたい。

(6) 仲間と協働して創り上げる表現活動の素晴らしさ

- ・ 仲間と一つのを創り上げたときの達成感や喜びを、今後の保育現場で生かしていきたいと思う。クラス全員で合唱や合奏をするときなど、一人では創り上げることができないということ、また友だちと協力をすれば創り上げることができるということを子どもたちに伝え、友だちの大切さを子どもと一緒に共有したい。

《アンサンブル》

(1) 仲間と共に課題を乗り越える力

- ・ 4年次生になると定期演奏会での卒業研究発表が控えている。3年次の時と比べて、個々の表

現力を存分に発揮できる分、プレッシャーも重くのしかかってくる。1人で頑張らないといけないと思うと気持ちも辛くなり、音楽が苦しいものになってしまうと思うので、そんなときこそ、このオペレッタで困難を乗り越えた経験を思い出し、ゼミの仲間と共に頑張っていきたいと思う。

(2) 課題解決に向けて粘り強く取り組む力

- ・オペレッタ表現活動を通して、粘り強く頑張る大切さを学ぶことができた。今後も、何事に対しても諦めること無く全力で粘り強く取り組みたい。

(3) 仲間の良さを認め合い、信頼関係を深める大切さ

- ・自分が表現することの楽しさを知ったので、子どもたちにも伝えられるようこの経験を生かしていきたい。また、仲間の良さを感じることでお互いを認め合い、信頼関係を深めることができると感じた。この学びを教員としての学級づくりにも生かしていきたいと思う。

(4) 子どもたちに表現することの喜びや楽しさ、素晴らしさを感じてもらいたい

- ・オペレッタ表現活動を終えて、私は人前で話すことがあまり苦にならないようになった。以前は、人前で何かをすることが得意ではなく避けて来たように思う。しかし、今はもう自ら進んで何でも挑戦しようという前向きな気持ちになった。それは、教員になった時、子どもたちの前で堂々と自分の思いを伝えることができることに繋がると思う。オペレッタ表現活動を通して得た自分に対する自信を、今後に生かしていきたい。そして、表現することの素晴らしさを子どもたちにも伝えていきたい。
- ・様々な公演を通し、人前に立つことに不安がなくなった。自分の伝えたいことをどう伝えるべきかをオペレッタの中で学んだ。この経験を生かし保育の現場で実践していきたい。また、子どもたちが劇遊びをする時には、子どもたちに表現する楽しさを感じてもらいながら、たくさんの方に挑戦できるような機会を作ってあげたい。

《考察》

上記の記述アンケート《キャスト》・《アンサンブル》を整理すると、学生がオペレッタ表現活動を終えて今後に生かしたいことは、以下の6つのカテゴリーに分類できる。

- (1) 子どもたちに表現することの楽しさ、素晴らしさを伝えたい
- (2) 児童、保護者、お客様とのコミュニケーションの取り方
- (3) オペレッタで培った豊かな表現力を保育に生かしたい
- (4) 自分の意見や考えを伝えることの大切さ
- (5) 伝えることの楽しさと、伝わることの感動を子どもたちに届けたい
- (6) 仲間と協働して創り上げる表現活動の素晴らしさ

多くの履修生が述べているように、今後の教育者としての人生に生かしたいと熱い想いを語ってくれたことは大変嬉しいことである。

おわりに

本学に赴任して今年で31年目を迎える。筆者自身がオペラにおけるベル・カント歌唱法や演技法について、ライフワークとして実践を通して研究してきた経緯もあり、赴任当初より児童教育学専門演習Ⅰ・Ⅱにおける音楽表現の研究として、オペレッタ表現活動に取り組んできた。研究成果の発表の場として、児童教育学科定期演奏会や兵庫県内の学校園でオペレッタ・ボランティア公演も行ってきた。現在までの延べ公演回数は86回を数える。

この度、履修学生へのアンケート調査を実施したのを機に、このオペレッタ表現活動を通して学生がどのようなスキルを身につけ、どのように心豊かな人に成長していくのかを考察し、今後の教育に生かしていきたいと考え本論文の執筆に至った。

ここで、改めて音楽の持つ力について考えてみたい。音楽は、人々の心を癒やし、人々に寄り添い、明日への希望や生きる力をもたらすものであるとともに、人間一人ひとりが自らの人生を生きていくための基礎的な能力を育てるという特性を持っている。具体的には、オペレッタ表現活動で培った能力である「表現力」、「創造力」、「想像力」、「感情移入力」、「協働する力」、「コミュニケーション力」等を育成するものであり、何よりも子どもの豊かな感性を育む情操教育にとって必要不可欠なものである。このような意味からも、音楽は人間が生きていく上での必要な基礎的な能力を育てるものであり、教育の中心に据えられるべきものであると考えられる。

さらに、音楽は国や文化の違いを超えて、世界の人々と共有し共生できるコミュニケーション・ツールでもある。このような音楽の力が異文化理解や共生の基盤となり、世界平和につながる寛容の心を醸成することにもなる。

将来、教員や保育士を目指す学生には、音楽教育が人間の心身の健全な成長のためにはなくてはならないのだと心に刻み、未来ある子どもたちの教育に尽力してもらいたいものである。

引用・参考文献

- 1 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編（平成29年7月）
（文部科学省／出版社：東洋館出版社）
- 2 標準音楽辞典（出版社：音楽之友社）
オペラ、オペレッタ、ミュージカル
- 3 やさしい合唱劇「みならい天使」
青島広志／台本と作詞・作曲（出版社：音楽之友社）
- 4 ショート・ショート・オペレッタ「もも・はな・かぐ・さか物語」
東 龍男 台本／青島広志 作曲（出版社：音楽之友社）
- 5 ショート ショート ミュージカル「海賊船長の子守唄」
鈴木悦夫 作／青島広志 作曲（出版社：音楽之友社）